

アラン・カブロー以後、欧米では「パフォーマンス」という分野は独立して存在し、今日においても活発に活動がなされているが、日本の場合、風倉匠に始まりダダカン、ゼロ次元、秋山祐徳太子と連なるイベント、ハプニングの流れはヨゼフ・ボイス、ナムジュン・パイク、ローリー・アンダーソンという「パフォーマンス」によって淘汰され、現在ではダンス、演劇、音楽の総合性という潮流に飲み込まれ、美術的概念の根源的な活動は、見つけることが困難な状況と化している。

その中でニパフの活動は貴重であろう。国内の閉鎖的な活動に止まらず、海外のアーティストと結びつきグローバルな意味でのパフォーマンスに対する探究を怠ることなく行っている。その中心人物と言えるのが、霜田誠二である。霜田は今回、玄米と塩麹による食料品である作品と普段発行している小新聞に加えて、玄米麹を貼り付けた平面作品を発表した。期間中に行われたパフォーマンスに立ち会うことが出来なかったが、さながら展覧会そのものが「パフォーマンス」として成立したと定義することが可能だ。



平面のタイトルは《玄米麹とカトマンズとハルビンとコルカタと》である。ネパールのカトマンズ、中華人民共和国ハルビン、インドコルカタが玄米麹と対話する。それは霜田が活動する土地であるだけでなく、広域に亘るアジアの、アメリカの独裁に対するメッセージであると読み解くことも可能であろう。象徴的な形にはジャクソン・ポロックから継投するジェストが込められているというよりも、絵画は生き物であるという美術の根底を教えてくれる。

大胆な平面と比較すると、小新聞は言葉通り、「米粒」のような字がぎっしりと画面を埋め尽くす。Web 上においても活発に言葉を発信する霜田の字が美しい。この文字に秘められている想いとは何だろうか。我々が失いかけているアジアの形がここに顕在しているのではないだろうか。描かれている内容は、霜田が彷徨う記録である。その時の状況を克明に記すことにこそ、パフォーマンスが未来に向けて育つ土壌が更新されていく。

霜田の展覧会を益々、見たいと言う欲望に駆られた。ここには霜田の軌跡ではなく現在の状況が立ち現れている。